問をもつ読者は、本書の文献利用の仕方をたしかめるためにも原著にさかのぼってぜひ確認されたい。

本書から何かを得ようときちんと読んでいただければおわかりいただけるように、シオニズム・イデオロギーから出てくる諸問題は解明・剔抉の価値がある。不動の反シオニストとしての私の結論を先取りしてはっきり申しあげれば、シオニズムは完全にまちがっている。しかし私のこの結論はきちんとした証拠から引き出されたものであり、要するに私独自の結論である。この結論に到達するのに用いた論証が説得的か否かについては、読者の御判断を仰ぐほかはない。

ニ・ブレンナー

ーク生まれのユダヤ系アメリ
の公民権運動など，一貫して
活動を実践し，不羈独立のユ
家として，ラジカルな批判的
に幅広く展開している．著書
3）のほか，とくにシオニズ
に跡づけた研究として『鉄の
ンスキーからシャミルまで
派』（1984）があり，その
リカ・ユダヤ人』（1986），『次
主党』（1988）などがある．

第1章　ホロコースト以前のシオニズムと反セム主義

フランス革命からドイツやイタリアの統一にいたるまでの時期には、資本主義とそのリベラルな価値・近代主義の価値のさらなる発展を追うようにユダヤ人解放が続いていく、そういう未来をも時代は予示しているように思われた。一八八〇年代のロシアにおいて起こったポグロムのいくつかの波さえ、来るべき時代の先触れというよりはむしろ死につつある封建的過去の最後の喘ぎと見ることが可能であった。しかし、一八九六年にテーオドーア・ヘルツル[一]が『ユダヤ人国家』を著した時には、かかる楽観的な構図を現実的なものとして描くことはもはやできなくなっていた。一八九五年に彼は、パリの群衆がドレフュス大尉[二]の死刑を求めて叫ぶのを目撃していたし、まさにその同じ年に、反セム主義者カール・ルエーガーがウィーン市長選挙で圧勝したのを喝采して迎えたウィーン中産市民たちの野卑な歓呼の声も、ヘルツルは直接耳にしていたのである。

後進国ロシアにおいてばかりでなく、まさにヨーロッパ産業社会の中心においても、ユダヤ人の夢を打ち砕くこうした事件の続く中で誕生したといえる近代シオニズム運動の要求は、考えられる限り下劣さから最も程遠いものであった。圧迫されたユダヤ民族を引きとって独自の国家建設によってあがなうというものだったからである。しかし運動はまさに最初からユダヤ中産市民の運命に対する次のような確信をあ

らわしていた。すなわち未来はユダヤ人を嫌う人びとのものであり、反セム主義は不可避の自然な考え方であるという確信をあらわしていたのである。反セム主義には勝ちえないと堅く信じる世界シオニスト機構はけっして反セム主義と闘わなかった。反セム主義への適合、そしてユダヤ人国家を手に入れるための反セム主義の利用、これがシオニズム運動の中心戦略になった。そして運動はホロコーストの時期までこの草創期の考え方に忠実であり続け、ホロコースト期もずっとそうであった。一八九五年六月、ヘルツルはシオニストになった時の日記のまさに書き出しの部分で、この固定化されることになったシオニズムの公理を以下のように記している。

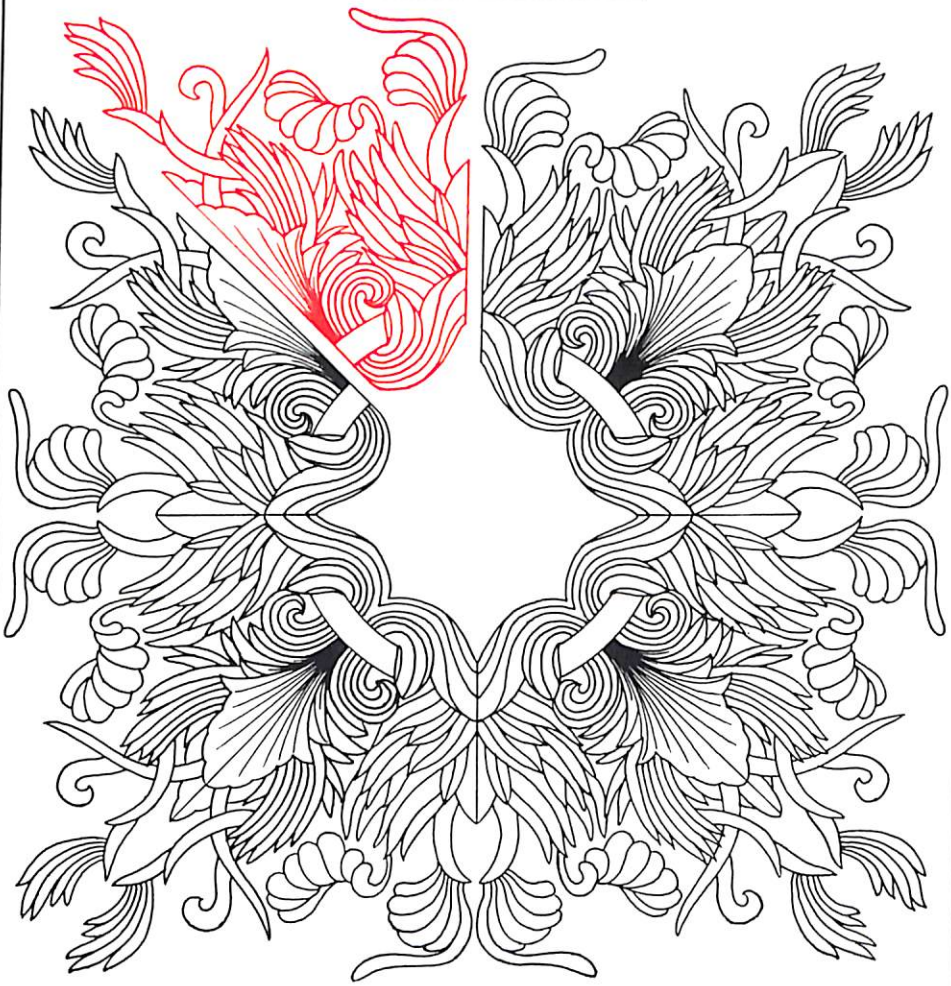
> すでに述べたとおり、パリで私は反セム主義に対しこれまで以上に自由な態度をとれるようになった。今や反セム主義を歴史的に理解し、容赦しはじめたのだ。わけても、反セム主義を「克服」しようとする空しさ・不毛さを認めるようになった。[1]

言葉の最も深刻な意味でヘルツルは時代の子であり、また出身階級の考え方を反映した人間であった。よき君主は「よき暴君」であると信じる君主制支持者でもあった。[2] ヘルツルの『ユダヤ人国家』には次のように大胆な見解表明が見られる。「現在の国々は民主主義に適合しない。今後もますます適合しなくなろう。……わが民族の政治的徳性を私は信じていない。我々は近代人の残り滓にすぎないからだ。[3]」

こうした全般的ペシミズム傾向のためにヘルツルは一九世紀末の西欧の政治環境について全く誤った判断を下すことになった。特に彼が誤解していたのはドレフュス事件である。この裁判の秘密主義、ドレフュスによる軍人気質にもとづく無罪の主張は、多くの人に事件がえん罪であることを確信させた。事件はユダヤ人以外の人びとの間でもドレフュスに対する巨大な支援運動をまきおこした。各国君主でさえ事件を問題にし、フランス国民が正気を失ったのではないかと疑った。他方でパリから遠く離れたロシア・プリピャチ湿地地方の寒村のユダヤ教徒がエミール・ゾラのために祈るようなこともあった。フランスの知識人たちはドレフュス支持の陣営に結集した。社会主義運動も労働者たちを味方に引き入れた。一方、事件を通してフランスの右翼は不信の目で見られるようになり、軍の名誉は傷つき、教会の権威も地に墜ちた。フランスの反セム主義は孤立状態に追いやられ、この状況はヒトラーの勝利まで続いた。しかしウィーンで当時最も有名だったジャーナリストのヘルツルがドレフュスを支持するデモンストレーションを組織したことは一度としてなかった。ヘルツルが論ずる時、事件はきまって反セム主義の恐るべき事例とされ、人びとが反セム主義に抗して共同戦線を張ったこととしては語られなかった。人びとに迫られ当局は一八九九年には再審法廷を開かざるをえなくなったのにである。軍法会議は五対二でドレフュス大尉の有罪を確定したが、情状酌量の余地があると判断し一〇年の刑に減刑した。ところがヘルツルは、ここにユダヤ陣営の敗北しか認めず、このユダヤ人犠牲者ドレフュスに対するユダヤ人以外の人びとの共感の大きさの重要性を貶価したのであった。

> ものいえぬ獣を公衆の面前でさいなめたら、人は義憤の声をあげないではいないだろう。フランス以外の親ドレフュス派の人びとの感情もこんなところだ。もちろん多くのユダヤ教徒が思いなしているとおり、義憤感情がまさに広くゆきわたって存在しているとしての話であるが。……要するに、ドレフュスに対して加えられた不正があまりにも大きかったので、われわれの相手にしている人間がユダヤ人であることを忘れてしまうほどである。……たとえば七人のうち二人あるいはひとりでもいいか

叢書・ウニベルシタス 705

ファシズム時代のシオニズム

レニ・ブレンナー著
芝 健介 訳